

重留村下遺跡 2

—第2次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第749集

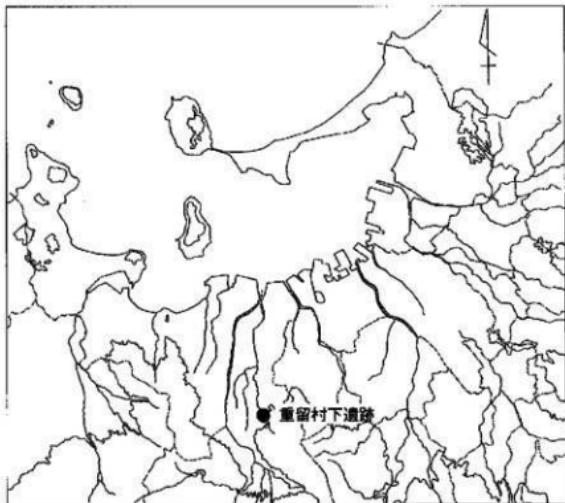
2003

福岡市教育委員会

shige tome mura shita

重留村下遺跡 2

福岡市埋蔵文化財調査報告書第749集



重留村下遺跡 2 次

調査番号 0160

遺跡番号 SGM-2

2003

福岡市教育委員会

序

福岡市には豊かな自然と先人によって育まれた歴史が残されています。これらを活用するとともに、保護し未来に伝えていくことは、現在に生きる我々の重要な務めです。しかし、近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は、平成14年度に実施した、店舗建設に伴って実施した重留村下遺跡第2次調査の成果を報告するものです。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料として活用いただければ幸いです。

最後に、発掘調査から本書の刊行まで、多くの方々のご理解とご協力を賜りました事に対しまして、心からの意を表します。

平成15年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 生田征生

目 次

I.はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の立地とこれまでの調査	1
III. 調査の記録	5
1. 調査の概要	5
2. 住居跡	5
3. 土 坑	11
4. ピット	11
5. その他の遺物	15
II. おわりに	15

挿図目次

Fig. 1 周辺の遺跡(1/25000)	2
Fig. 2 重留村下遺跡調査地点(1/4000)	2
Fig. 3 調査区位置図(1/500)	3
Fig. 4 遺構配置図(1/200)	4
Fig. 5 SC001,005実測図(1/60)	6
Fig. 6 SC006,009実測図(1/60)	7
Fig. 7 SX010実測図(1/60,20)	8
Fig. 8 SC001,005,006,009出土遺物実測図(1/3)	9
Fig. 9 SX010,011出土遺物実測図(1/3)	10
Fig. 10 土坑実測図(1/40)	12
Fig. 11 土坑出土遺物実測図(1/3, 1/2)	13
Fig. 12 ピット出土遺物実測図(1/3)	14
Fig. 13 その他の遺物実測図(1/3)	15

例 言

1. 本書は店舗建設に伴い平成14年3月4日から同年3月29日に発掘調査を実施した重留村下遺跡第2次調査の報告である。
2. 本書に使用した方位は磁北で、座標北から6° 21' 西偏する。
3. 本書に使用した遺構の実測は担当者、遺物の実測は井上加世子および担当者、挿図の製図は井上と担当者、写真撮影は担当者が行った。
4. 本書の作成にあたり上田保子、前田みゆきの協力を得た。
5. 本章の執筆、編集は担当者が行った。
6. 本書に係わる図面、写真、遺物はすべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管される予定である。

調査番号	0160	遺跡略号	SGM-2	分布地図番号	重留84
調査地地籍	福岡市早良区重留1丁目510-1, 511-5			事前審査番号	13-2-572
申請地面積	3 9 1 6 m ²	調査対象面積	2 8 0 m ²	調査実施面積	1 9 9.4 m ²
調査期間	2002.3.4 ~ 2002.3.29				

I.はじめに

1. 調査に至る経緯

平成13年10月9日、吉岡順子氏より早良区重留1丁目510番1他地内の造成並びに店舗建設に伴う開発計画事前審査願が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である重留村下遺跡地内にあたり、平成6年南側に隣接する道路部分で1次調査が行われ、古墳時代から中世にかけての遺構、遺物が多数検出されていることから、遺跡の存在が十分予想された。このため埋蔵文化財課は平成13年11月8日に試掘調査を行い、古墳時代を中心とした遺構と遺物を確認した。埋蔵文化財課はこの結果をもとに関係者との協議を重ね、建物基礎の設計変更等の協力を得た。しかし、道路からの進入路の切り下げ工事が遺構面に与える影響を避けることは難しく、その部分についての発掘調査による記録保存を免れないと判断した。その結果、両者の間で受託契約を締結し、平成14年3月4日から同年3月29日まで発掘調査を実施した。

調査の実施にあたっては、地権者の吉岡順子氏をはじめ関係者の方々には多大なご理解とご協力を頂いた。ここに記して感謝いたします。

2. 調査の組織

調査委託：吉岡順子

調査主体：福岡市教育委員会

調査総括：文化財部埋蔵文化財課 課長 山崎純男 第1係長 山口謙治 力武草治

事前審査：埋蔵文化財課 事前審査係長 田中寿夫 大庭康時 田上勇一郎

庶務担当：宮川英彦

調査担当：池田祐司

調査作業：井上八郎 井上ムツ子 井上忠久 海津宏子 下司照枝

永島重俊 広瀬 梓 細川友喜 矢野和江 吉川春美

II. 遺跡の立地とこれまでの調査

重留村下遺跡群は早良平野上部の東側に位置し、油山山塊から西に延びる丘陵の先端部分から一段落ちた台地上に広がる。その範囲は東側の丘陵部と西側の沖積平野にはさまれる東西330m、南北710mである。東側の丘陵上には重留古墳群や古手の須恵器窯である重留古窯の調査が行われている。調査区西側では、金屑川から西側に四箇田遺跡群と重留遺跡群が広がる。四箇田遺跡では26次の調査が行われ、重留遺跡群でも圃場整備に伴う調査で早良平野最南端の前方後円墳である重留拌塚古墳等や縄文後期から中世の集落地が調査されている。同じ台地上に於ける北東側の浦田遺跡では堀塹墓の調査が行われている。北側は広い沖積平野が広がり、現代でも条里がよく残る。

本調査区は、重留村下遺跡群の北端に位置する。1次調査地点の北側に隣接し、標高28mを測る。台地の西端にあたり、丘陵裾には貞島川が流れる。東側は丘陵の急勾配が国道を挟んですぐ近くに迫る。現状は水田で、調査時は今回の開発に伴う客土造成が成されていた。水田は国道よりも高い標高で営まれていた。

平成6年、南側の市道四箇新村線建設時に第1次調査が行われている。1次調査では、弥生時代中期の土坑、溝、古墳時代の竪穴式住居跡9棟、古代、中世の土坑等の遺構が検出されている。特に古墳時代の住居跡はカマドの残りがよく、廃棄時に祭祀を行っている。また遺物では、縄文時代後期の鐘崎式土器が出土している。

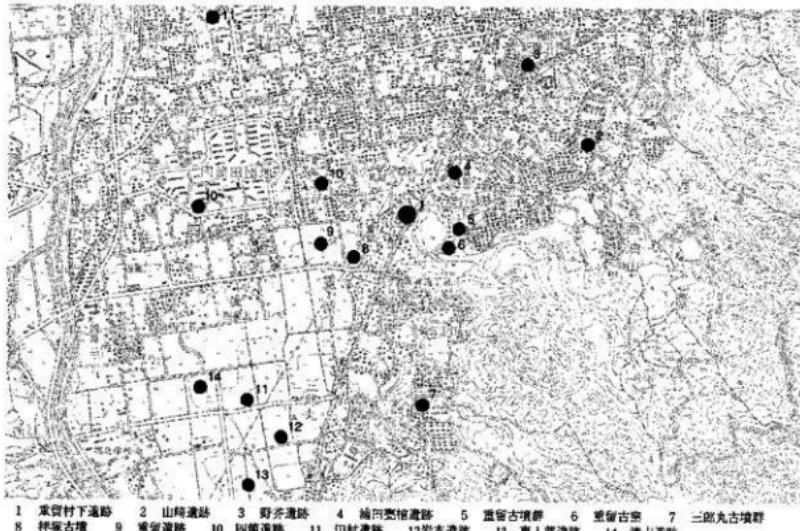


Fig. 1 周囲の遺跡 (1/25000)

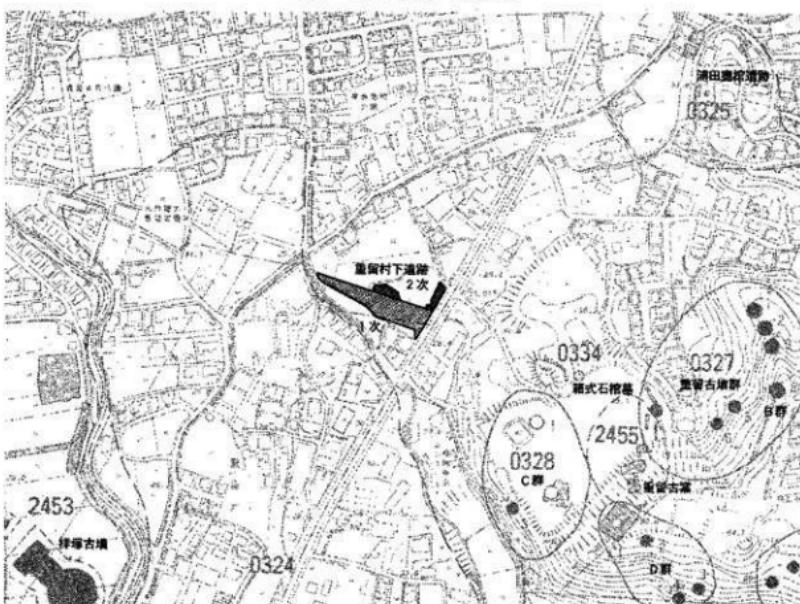


Fig. 2 重留村下遺跡調査地点 (1/4000)

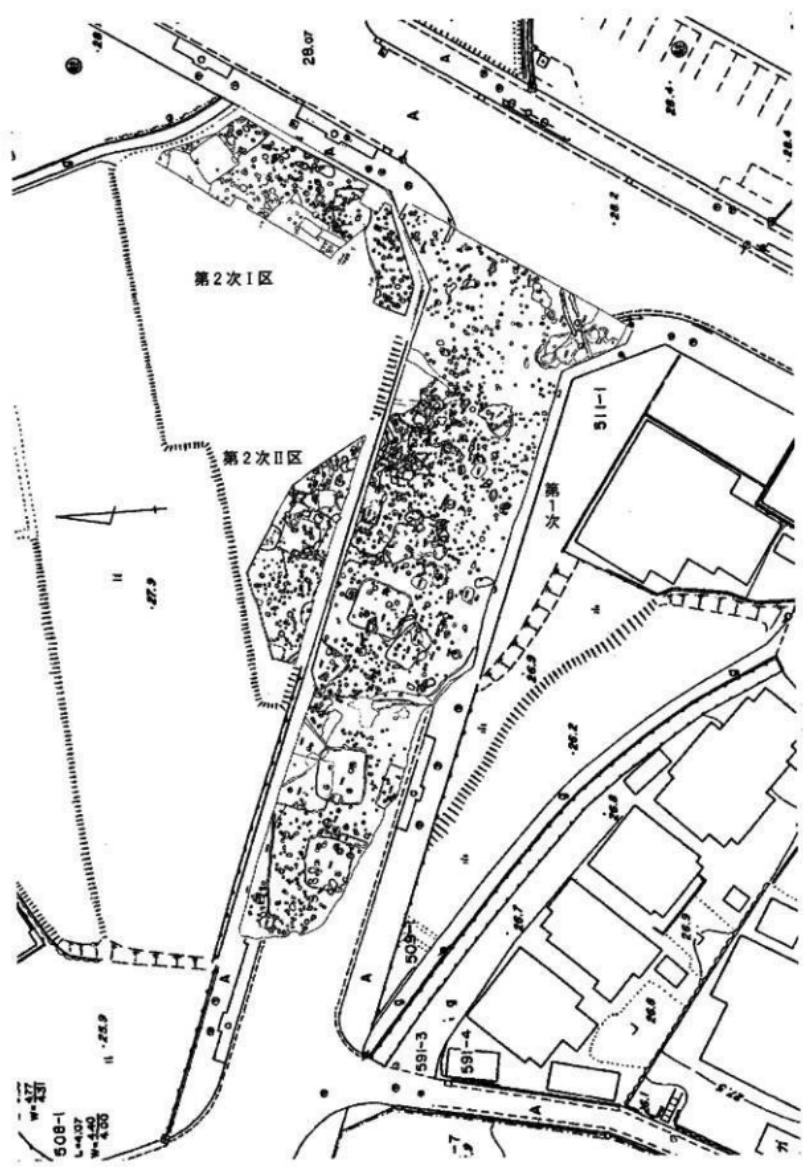


Fig. 3 調査区位置図 (1/500)

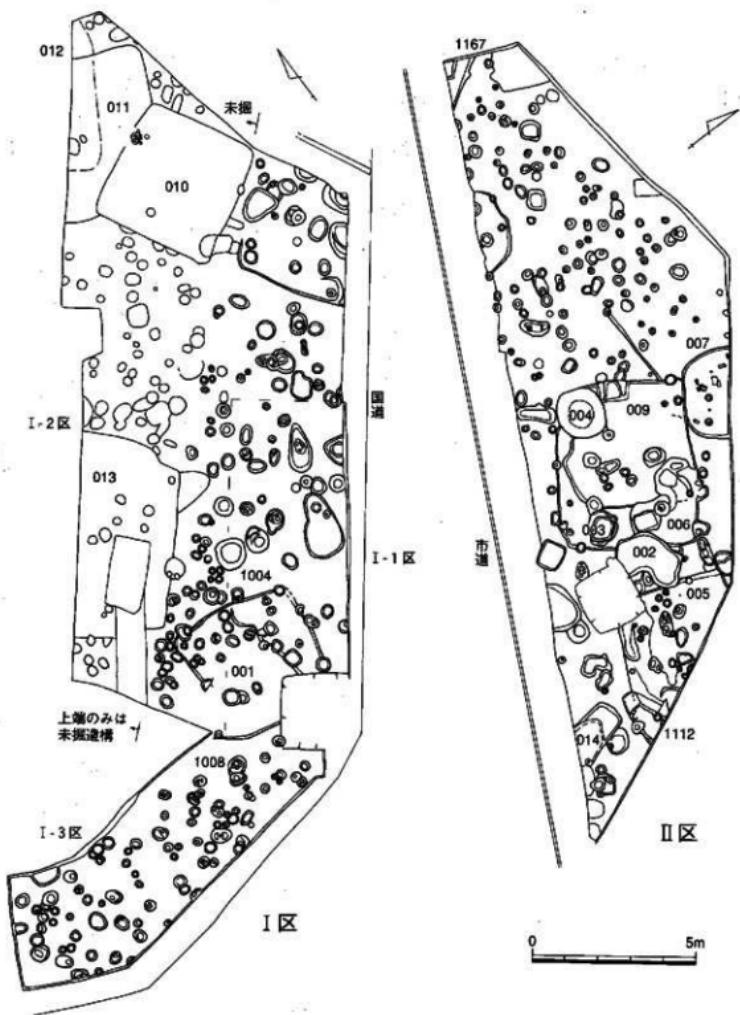


Fig. 4 遺構配置図 (1/150)

III. 調査の記録

1. 調査の概要

調査は、前述のように遺構面を破壊するおそれがある進入路および看板の基礎建設箇所について行った。進入口は、国道263号線に面する東側と、市道四箇新村線に面する南側との2カ所があり、前者をI区、後者をII区とした。I区は建設工事の工程上、2回に分けて行い、便宜的にI-1区、I-2区と呼称する。また看板の基礎部分はI区に接するためI-3区としている。

遺構面は砂粒を多く含む暗灰褐色粘質土または黄褐色粘質土上であるが、この面では遺構を検出しがたい。これらの土層の5から10cm下に広がる灰白色から黄灰褐色粘質土まで下げるとはっきりする。遺構面は地表同様に西側に向かって緩やかな傾斜で下がる。I区では東南端の浅い箇所では10cmで遺構面に達し、北西隅では客土、灰褐色、灰茶褐色土等を除去した表土から70cmほど下で遺構面に達する。

遺構の密度は高く、弥生時代中期の土坑1基、6世紀から7世紀の堅穴住居跡7軒以上、中世の土坑、多数のピットを確認した。遺構の覆土は、おおむね茶褐色系の色調を呈し、粘質土に砂粒が多く混ざりよく練まっているため堅く掘削には苦慮した。

調査はI-1、I-3、I-2、II区の順を行った。このうちI-2区で検出した遺構のうち西よりものについては、遺構面が現地表から50cm以上となり工事による掘削のおそれがなく、調査期間も限られていたため遺構検出のみで掘削していない。そのためI区で遺構検出を行った147.8m²のうち調査を行ったのは84.4m²である。II区でも西側の一部に掘削を行っていない遺構がある。II区の調査面積は115m²である。以下、I区、II区まとめて報告する。

遺構の密度は高く、弥生時代中期の土坑1基、6世紀から7世紀の方形堅穴7軒以上、中世の土坑、ピット等を確認した。

2. 住居跡

I区では1棟、II区では3棟の方形堅穴を調査し、そのうちII区の2棟については住居跡と考えられるが、他の2棟については可能性がある遺構として、この項で取り上げる。また、I区では掘削を行っていない遺構に住居跡と推定されるものがあり、それらについても報告する。

SC001 (Fig.5) I-1区南端で検出した遺構で1辺390cmの方形プランを呈し、深さ3cmから14cmを確認した。西側部分は残りが悪く、不確定なところがある。一方東側は不整形なプランで段を成して下がっている。住居跡と予測して掘削を行ったが、カマド、炉跡、硬化面は検出できなかった。また、床面でピットは検出したが、主柱穴と言いつぶれるものではない。これらの事から住居跡とするには疑問が残る。覆土は灰茶褐色粘質土で砂粒を多く含む。

出土遺物 (Fig.8) 遺物はほとんどなく、図化した1点のみである。それも遺構に伴うものか疑問がある。1は須恵器の蓋で外面はなで、内面は回転なで調整で仕上げる。灰色を呈し、細砂粒を含むが精良な胎土である。1/2強が残存する。

SC005 (Fig.5) II区東側の際で検出した遺構で、方形プランの斜め半分弱と考えられるプランを検出した。南東、南西隅をSK012、擾乱に切られ、規模ははっきりしないが東西4mほどを想定している。南側には幅60cmほどのテラス状を呈し浅く、北側は緩やかに深くなる。遺構内にピットはあるが明確に主柱穴と言えるものはない。覆土は暗褐色砂質土で下部には黄褐色粘質土ブロックが多く入る。3層は貼床とも考えられる。規模と想定される形態から住居跡としたが、床面の傾斜等疑わしい要素もある。

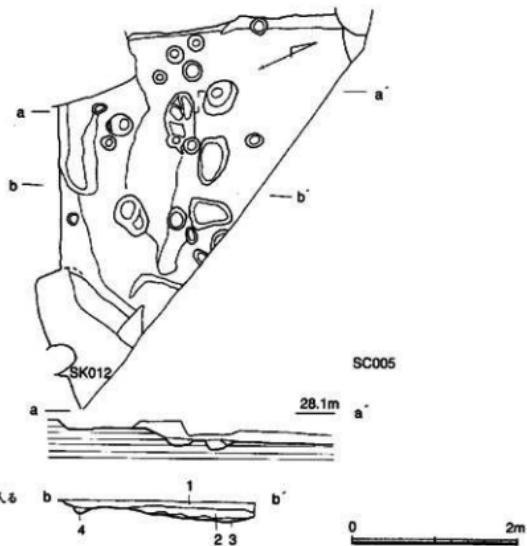
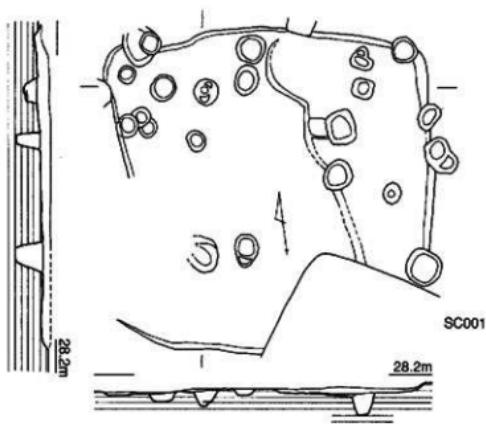


Fig. 5 SC001,005実測図 (1/60)

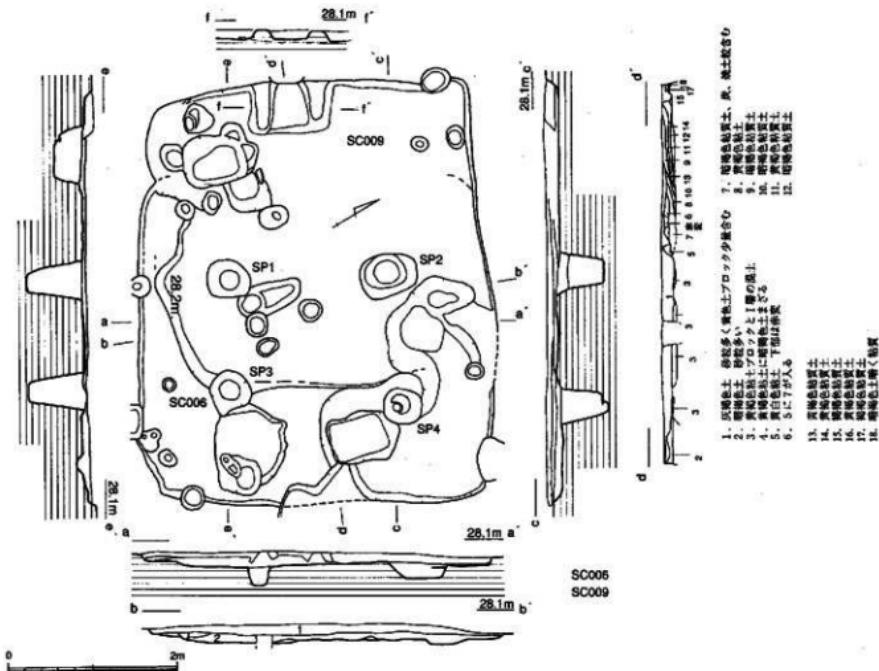


Fig. 6 SC006,009実測図 (1/60)

出土遺物 (Fig.8) 遺物は土師器と須恵器が出土したが小片が多い。2は須恵器の杯蓋で身の可能性もある。径8.8cmを復元したが小片のため不確か。3, 4は須恵器の蓋で天井部と口縁部の先に段を持つ。胎土は精良である。5は須恵器の壺の胴部で外面に疑似格子目叩き、内面に同心円状の当て其痕が残り、いずれも後でなでている。6は土師器の壺の取手で器面粗れのため黄白色を呈すが、一部暗い橙色の部分が残り化粧土の様なものが施されていたのかと思われる。6は土師器の壺の頸部で胴部内面に削り調整が見られる。8は鶴の卵状の砂岩質の砾で土玉に形態が似ており掲載した。10.47gを測る。9から11は弥生土器で9は中期の壺の口縁部、10は壺の口縁部、11は器台の下部である。

S C 006, 009 (Fig.6) II区中央部で検出した遺構で、平面プラン長方形の遺構と判断し掘削を行ったが、途中2軒の住居跡が重なっているという認識に至った。SK002, 004、に切られる。このうちSC006が009を切ると考えている。

SC006は、南壁の東から370cm付近のコーナー部から、東西土層図の1層の立ち上がりを結んだラインが西側辺のプランと考えられる。SC009は東側から南側に見られるベット状の小さな段落ちから西側のプランまでのほぼ方形プランと考えられる。土層図に目を転じれば、南北、東西土層の1層がSC006の覆土で、2,3層がSC009の覆土と考えられる。東西土層では西から180cm付近で1層は立ち上がり浅くなる。その下の6層は白色粘土に暗褐色粘土、7層は暗褐色粘質土に炭、焼土を多く含み、その10cmほど東の1層中に黄白色粘土ブロックが見られる。以上がSC006のカマドの断面と考えている。ただし平面的には確認できていない。8層以下は黄褐色粘質土と暗褐色粘質土が細かな互層を成しておりSC009のカマドに伴う土層と考えているが、7層との境は顕著ではない。

以上の認識から SC006は東西400cm、南北430cmの方形プランが復元できる。SP1から4までの4本柱

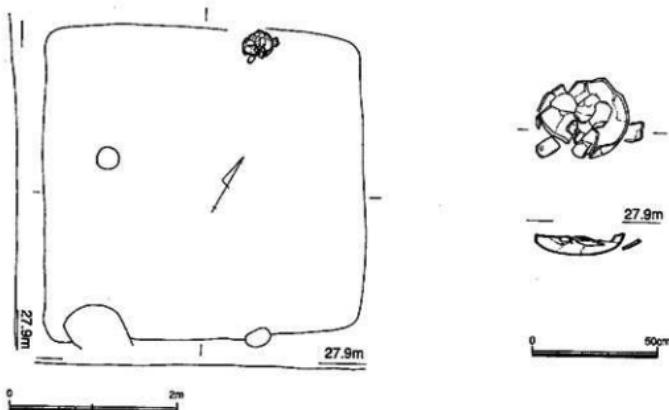


Fig. 7 SX010実測図 (1/60,20)

の建物で、西側にカマドを持つと考えられる。

SC009は東西370cm、南北380cmの方形プランが復元できる。南東隅の形の乱れは床近くしか残っていないためであり、また南西隅はSK004に切られるため残っていない。西壁中央にはカマドを持つ。黄白色粘土で構築した両袖のカマドである。主柱穴は精査したがはっきりしなかった。

出土遺物 (Fig.8) 上記の様な状況であるため、取り上げた遺物の中には所属遺構を判断できないものがある。須恵器と土師器が出土しているが、時期が判断できるような特徴的な遺物は少ない。混ざり込みの遺物を含めて一通りのものを取り上げる。

12から21はSC006出土と判断したものである。12から15は須恵器の杯である。いずれも小片のため、傾きは曖昧なまま掲載した。12から14がIV期で住居跡の時期に近いと考えられる。16は土師器の壺で1/6からの復元口径16.8cmを測る。口縁部は横なで仕上げ、胸部外面にわずかに刷毛目が見られ、内面は削りである。1mm大までの砂粒を含む。17は壺の頸部で1/4からの復元径13.4cmを測る。外面には調整具の小口痕と考えられる痕跡が見られ、内面は削り調整である。2mm大までの砂粒を多く含む。18は須恵器の壺の腹部で外面は平行叩きの後に搔き目を施し、内面には同心円の当て具痕が残る。19は土師器の壺の胴部で底部に近いと考えられる。外面はなで調整で若干の煤が残り、内面は指によると考えられる調整が顕著に残る。1, 2mm大を主体とした砂粒を多く含む。20、21は弥生時代中期の壺で明らかな混じり混みである。

22, 23は西壁のカマドのすぐ南側で出土したSC009に帰属する土器である。22は土師器の底部で外面に疑似平行叩き痕が明瞭に残る。内面は調整不明でなでか。2次焼成を受け、外面上部が赤変する。胎土に砂粒は少なく、器壁を薄く仕上げる。23は土師器の壺で肩曲の具合から底部と考えられる。外面はなで調整で煤が残り、内面は削り調整を施す。胎土に1mm大の砂粒を含み、器壁は厚い。このほか、ピット中より鉄滓の小片が1点出土している。

SX010 (Fig.7) 1区北端部で380×380cmの方形プランを確認した。掘削はしていないが、住居跡と考えている。覆土は茶褐色粘質土である。西壁際に土師器が遺構検出中に露出したためこの土器の

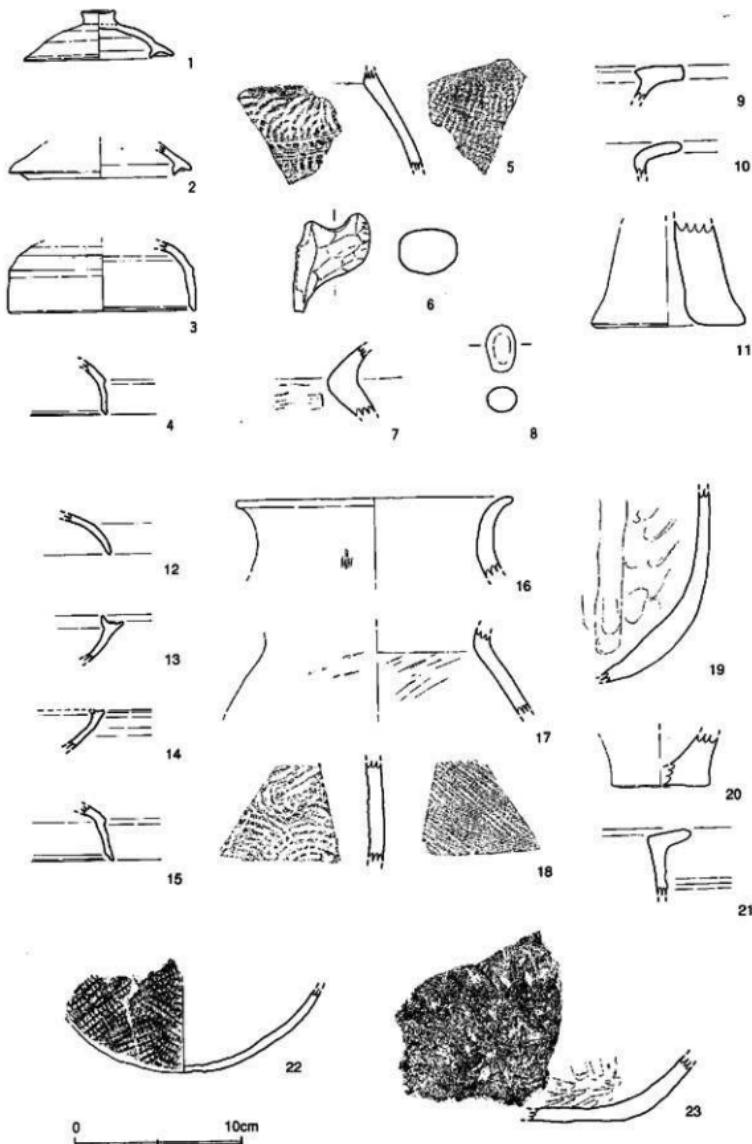


Fig. 8 SC001,005,006,009出土遺物実測図 (1/3)

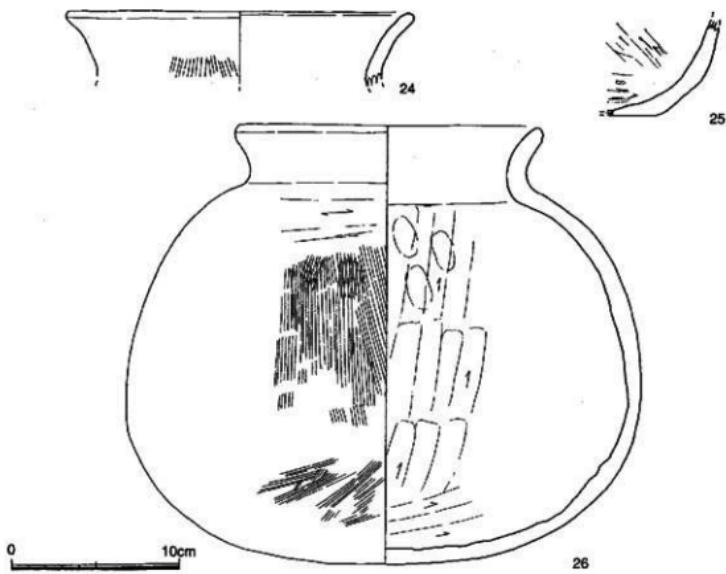


Fig. 9 SX010,011出土遺物実測図 (1/3)

み取り上げた。

出土遺物 (Fig.8) 26がFig.7で出土状態を示した土器で、ほぼ正置された状態で出土した。土器の臺で横幅が広い。頸部から口縁部にかけて大きくカーブし、口縁部に丸みを持たせて仕上げる。器壁は厚い。底部と胴部の境は不明瞭で、整地すると安定しない。外面下部は横方向、上部は縱方向を主体とした刷毛目調整を施し、その前段階に丁寧なまでを施している。口縁部は強い横なでである。内面は粗い削り調整が明瞭に残る。2mm大の砂粒を多く含む。25は26を掘り上げた時に一緒に出土した臺の底部付近で別個体である。外面は2次焼成により暗橙色から橙色を呈し、器面あれのため調整不明。内面には削り調整が見られる。底部と胴部の境には緩やかな稜があり、底部は平坦である。

SX011 (Fig.4) SX010の西に方形プランになると考えられる遺構を検出した。掘削は行っていないが住居跡の可能性があると考えている。調査範囲外に広がり、SX010に切られる。遺構の残りは悪く、西壁際ではほとんど床がでている。南北長4.5mを測る。

出土遺物 遺構検出時に若干の遺物が出土した。24は臺の口縁部で横なで調整を施し丸みを持って仕上げる。胴部外面には刷毛目調整が見られる。

SX012 (Fig.4) SX011の床に別の遺構が確認できた。方形プランの一端になるとを考えているが、大部分が調査区外であるため不明である。覆土は暗茶褐色で、これも遺構の残りは悪そうである。土器器、赤生土器片が出土している。

SX013 (Fig.4) I区中央西側で検出した遺構で調査区外に広がる。方形プランが予想される。検出した一辺は6mとやや長めで北辺にコーナーが見られ、複数の遺構の切り合いと考えられる。擾乱の断面の観察から南側については20cmほどの深さを確認した。

3. 土坑

土坑と呼べる規模の遺構は多いが、遺物が出土しないものが多い。その中から遺物をある程度出土したもの、特徴的なものについて報告する。

SK002 (Fig.10,11) II区中央部でSC005,006を切る不整形の土坑で、覆土に暗褐色粘質土に黄褐色粘質土ブロックが混じる。遺物は土師器、須恵器の小片が出土した。32は鉢付きの釜で鉢の下に突起物が折れた形跡がある。他に土師皿片も出土している。

SK003 (Fig.10) SK002のすぐ南西に位置する方形の土坑でSC006を切る。黄褐色粘質土を覆土とする。土師器の杯と考えられる破片が出土している。

SK004 (Fig.10,11) II区中央南よりで検出した遺構でSC009を切る。径150cmほどの円形プランで、断面レンズ状を呈す。暗褐色粘質土を覆土とする。少量の遺物が出土した。33は土師器の壺で外面は暗褐色から茶褐色でなで調整、内面は淡茶褐色で削り調整を施す。1/6からの復元頭部径16cmを測る。同一個体と考えられる底部片があり25のような平底である。他に弥生土器、土師器、須恵器の小片が出土した。

SK007 (Fig.10,11) II区中央北壁際で検出した土坑でSC009に切られ、調査区外に伸びる。隅丸方形または円形プランになると考えられる。円形であれば径280cmほどで深さ20cmを測る。床に2つピット状のくぼみを検出したが浅い。覆土は暗褐色土でSC009等よりも暗く砂粒を多く含む。床面の硬化、焼土は見られない。床より5から10cm浮いた状態で弥生土器が出土した。27は鋤先口縁の壺で大きく4つに割れた状態で出土した。胴部上半から口縁部が一周する。胎土には1, 2mm大の砂粒を非常に多く含む。器面は粗れており調整不明。28は支脚で完形品が割れた状態で出土した。

29から31は器台である。29, 30は外面に幅広の刷毛目調整が見られる。器壁は薄目で1, 2mm大の砂粒を多く含む。31は完形品である。やや厚手で口縁部に強い横なでを施す。外面の刷毛目は細かい。このほかにも破片が出土しているがごくわずかである。遺物の廃棄後すぐに埋まつたか、他の遺物が入り込まない環境にあったことが伺われる。また、支脚、器台が目立つことは、遺構の性格を反映したものと考えられる。

SK014 (Fig.10) II区の東側隅で検出した土坑で長方形プランと考えらるが、調査区外に広がる。南側に段を成して深くなる。暗褐色粘質土に黄褐色粘質土ブロックを含む。遺物は出土していない。

SK1004 (Fig.10,11) I区中央で検出した円形プランの土坑で径95cm、深さ20cmを測る。灰褐色粘質土を覆土とする。34から37が出土した。34は土師皿片で橙色を呈す。糸切り底と思われる。35は青磁の碗でくすんで淡い灰緑色を呈す。36は糸切り底の土師皿で1/6からの復元口径8.7cmを呈す。37は銅製金箔貼りの耳環で外径2.7cm、内径1.6cm、7.81gを測る。他に土師器片少量と陶器片が出土している。

SK1112 (Fig.10) II区の東側の北側壁沿いに位置し、SC005を切る。北側のプランを記録しておらず、図示できなかった。茶褐色土を覆土とする。土師皿片と少量の土師器片が出土した。

SK1167 (Fig.10) II区の西端で検出した遺構で直線的なプランが調査区外に伸びる。壁際に溝状のくぼみがある。1次調査の古墳時代の住居跡SC039のプランと整合しそうだが、少量の糸切り底の土師皿片が出土しており時期が異なる。遺物が少なく混じり込みの可能性も捨てきれない。

4. ピット (Fig.12)

I、II区で多くのピットを検出した。柱穴と考えられる大きく深いものもあるが、平面的に建物として把握できたものはない。遺物が出土したものは多いが、土師器の小片が多く圓化に耐えるものは少ない。その中で主なものを報告する。

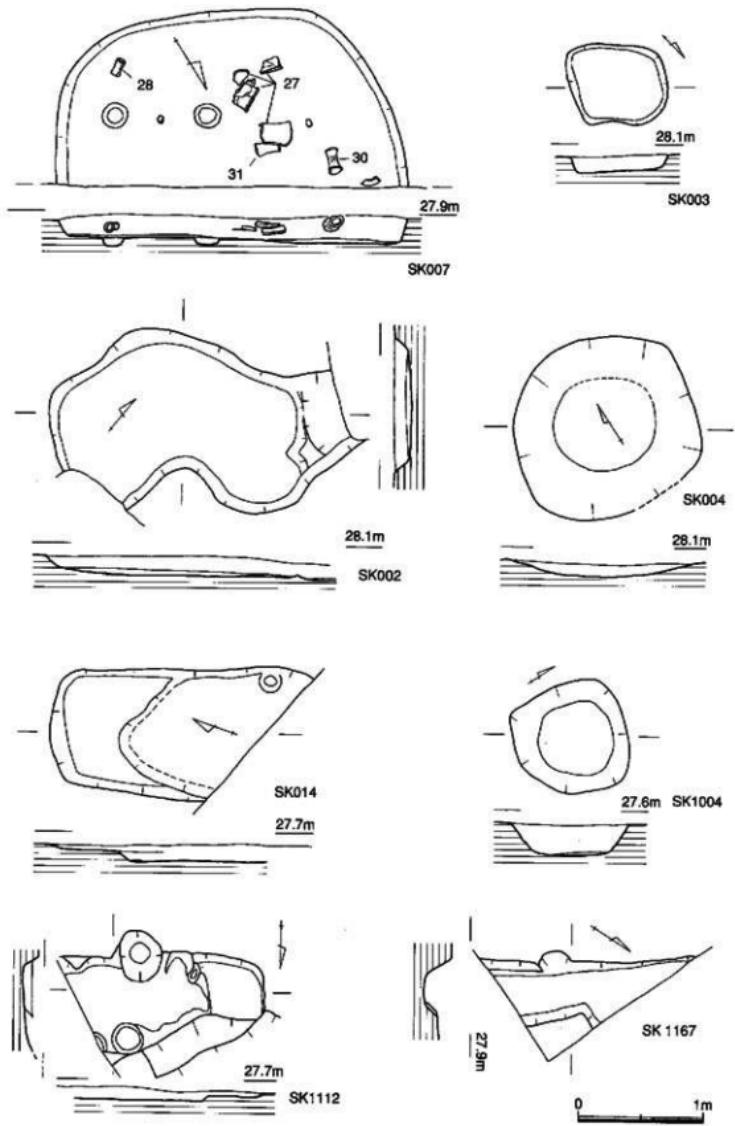


Fig.10 土坑実測図 (1/40)

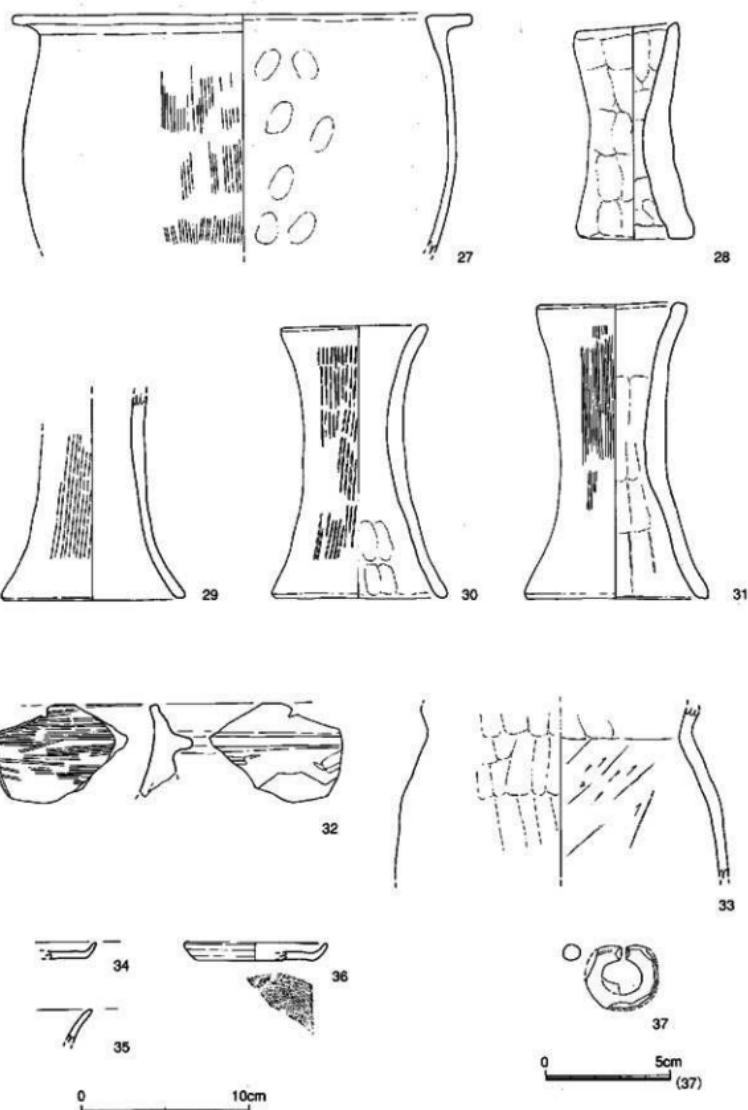


Fig.11 土坑出土遗物实测图 (1/3、1/2)

Fig.11 土坑出土遗物实测图 (1/3、1/2)

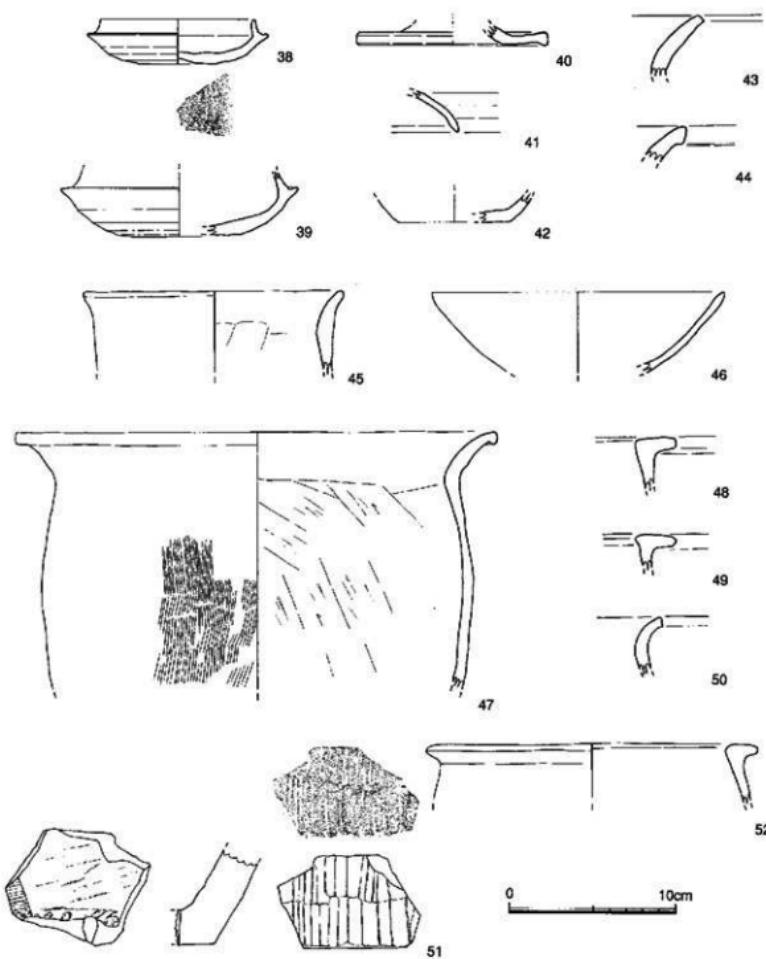


Fig.12 ピット出土遺物実測図 (1/3)

38から41は須恵器である。38は杯で1/8からの復元口径9.3cmを測る。外面は回転なでおよび回転へら削りで天井部にへら記号が見られる。1mm大までの砂粒を含み、内面小豆色を呈す。39は杯身で口縁端部を欠く。1/6からの復元口径は11.5cmと推定される。40は高杯の脚で1/2弱からの復元口径11.2cmを測る。胎土に砂粒をほとんど含まない。41は杯蓋か。胎土に砂粒をほとんど含まない。42はへら切り底の土師皿で橙色を呈す。1/3が残存する。43は須恵器で鉢等の口縁部か。器壁は厚く、胎土の砂粒は少ない。44は土師質の土器の口縁部で外面に断面三角形の突帯がつき須恵器の壺の器形に似る。胎土に砂粒を多く含み、焼きは堅い。45は土師器の壺の口縁部で外面はなで、内面胴部には削り調整を施す。1/6からの復元口径15.6cmを測る。46は土師器の杯で高台が付くと考えられる。1/8からの復元口径17.6cmを測るが小片からのため疑問がある。胎土は細かく少量の砂粒を含む。47はSC001南のSP1008(Ph.18)出土の土師器の壺で倒立した状態で1/3が出土した。復元口径29cmを測る。口縁部に

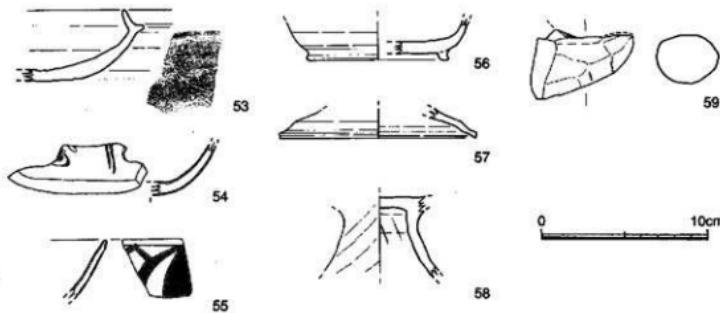


Fig.13 その他の遺物実測図 (1/3)

は強い横なでを施し、胴部外面は刷毛目調整、内面には削りを施す。黄白色を呈し、器面は凹凸が多い。外面には煤がわずかに付着する。48、49は弥生中期の壺の口縁部である。50は土師器の外反する口縁部である。小片のため口径は復元できないが大型品の壺になると考えられる。外面に横なで、内面なでで胎土に2mm大の砂粒を含み、茶色を呈す。51は石鍋の底付近である。底に穿孔があり、破面に加工痕が残ることから再利用されたものと考えられる。52は弥生中期の壺で胎土に砂粒を非常に多く含む。

5. その他の遺物 (Fig.13)

遺構面より上層出土、所屬遺構不明の遺物のうち遺構出土の遺物になかったものを示す。53は須恵器の杯身である。器壁が厚い。体部に弧状のへら記号が施されている。54、55は龍泉窯系青磁の碗である。54は内面に飛雲文と考えられる文様を施す。55は外面に鎌連弁文を施す。

56は須恵器の高台付きの杯で1/2からの復元である。57は須恵器の蓋で1/8弱からの復元口径11.8cmを測る。58は須恵器の高壺の脚部である。59は土師器の壺の取手である。

IV. おわりに

1次調査同様、弥生時代から中世にかけての遺構、遺物を検出した。1次調査で出土している縄文時代の遺物は確認していない。黒曜石も数点の碎片のみで製品はない。弥生時代の遺構はSK007の土坑1基のみである。1次調査と同様中期前半から中頃のもので支脚、器台が日立つ点が特異である。1次調査のSK019でも支脚2点のみが出土しており類似している。遺構の分布は散漫であるが広がり、住居跡の存在が予想される。古墳時代ではSC006, 009が明確な住居と考えている。時期をはっきりできるような出土状態の遺物はないが、1次調査のSC008などと主軸の方向とカマドの位置は同じだが、出土遺物IV期の須恵器が出土しており6世紀末～7世紀代のものと考えられる。SC009, 006間の時間差もこの中におさまる時期と予想される。ⅢA期の遺物は出土しているが遺構は確認できなかった。1次調査の遺構分布とあわせると、北側に6世紀から7世紀代の集落がかなりの密度で広がることが予想される。また、遺物では金箔貼りの耳環が注目される。出土遺構が中世であることから近隣の古墳等からの混入品と考えられる。古代、中世の遺物は出土しているが、遺構は不明である。ピットの中に、これらの時期の建物を構成するものがあると考えられる。1次調査で注目された鉄滓は数点の小片 (Ph.19) が出土したのみだった。

今回の調査では、特に弥生時代、古墳時代の住居跡等の遺構の広がりを確認し、舌状の台地にまとまる集落景観の一端をかいま見ることができた。



Ph. 1 I-2区全景（南から）



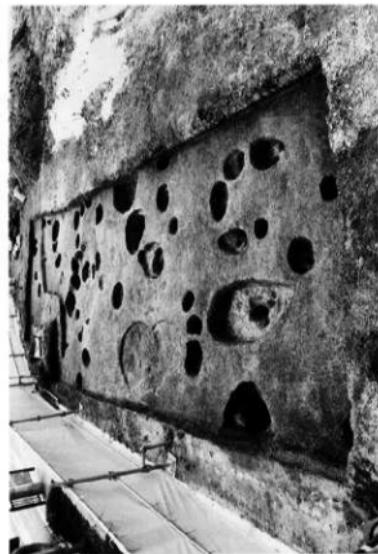
Ph. 2 II区全景（東から）



Ph. 5 I-2区全景（北から）



Ph. 6 II区全景（西から）



Ph. 3 I-1区全景（北から）



Ph. 4 I-3区全景（西から）



Ph. 9 SC001 (北から)



Ph. 10 SK007 (南東から)



Ph. 7 SC006,009 (東から)



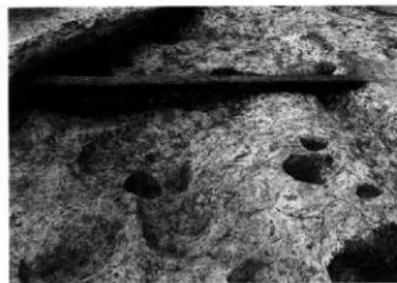
Ph. 8 SC009 (東から)



Ph.11 SX009カマド（東から）



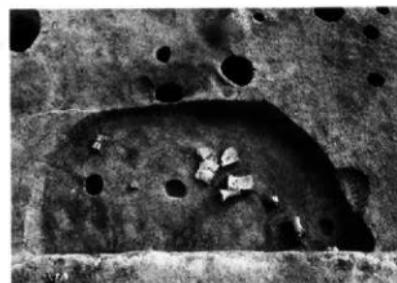
Ph.15 SX010、011検出状況（南から）



Ph.12 SX005（西から）



Ph.16 SX010出土遺物（東から）



Ph.13 SK007（北から）



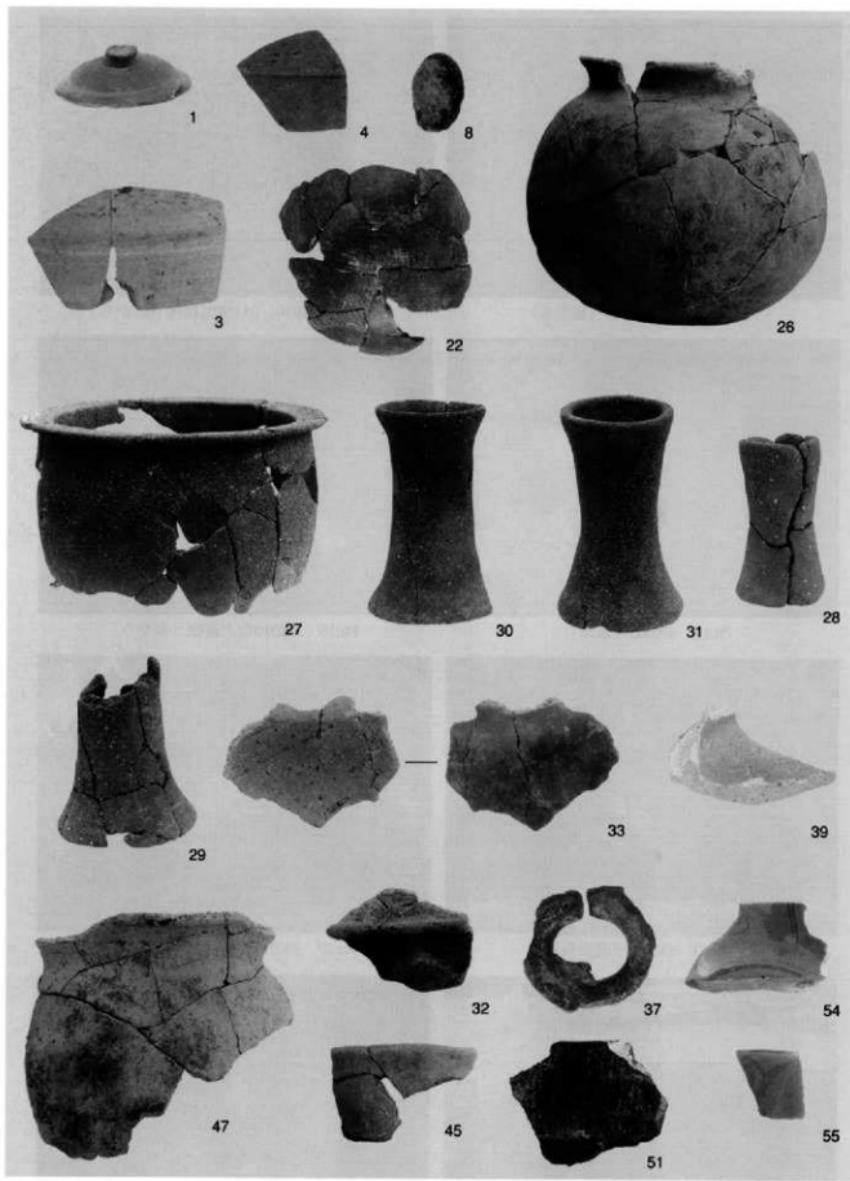
Ph.17 SX013検出状況（南から）



Ph.14 I-2区北西隔土層（東から）



Ph.18 SP1008（北から）



Ph.19 出土遺物

重留村下遺跡2

福岡市埋蔵文化財調査報告書第749集

2003年（平成15年）3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号
(092) 711-4667

印刷 楠大里印刷センター
福岡市東区二又瀬新町12-29
(092) 611-3118